



メスがつくり出すのは ただひとつの 「スマイル」

愛嬌ある名前とは裏腹に、強靱な体力と精神力を要するハードな医療ボランティア、「スマイル作戦」。

紛争地や極貧国に向かい、目を背けたくないような痛々しい傷跡に治療を施す。

そんな過酷なミッションに、楽しそうに参加しているのが与座聡医師だ。

与座医師にとっての「スマイル作戦」とはいったい何なのか。

その胸中にメスを入れてみると、使命や博愛などで飾られていない

シンプルなボランティア精神が見えてきた。

関係性
の
未来



行き先は激戦地 「ヤバイ」旅の始まり

豊かな白髪に、ほらかな笑みをたたえて、「遅くなってごめんなさいね」と言いながら、与座聡医師は現われた。第一印象から、虚を衝かれる。その姿と、「内戦や貧困にあえぐ発展途上国で治療活動を行なう形成外科医」という、どこか殺伐としたイメージが結びつかなかったからだ。

一体どんないきさつで、この柔和な先生が「スマイル作戦」と呼ばれる医療ボランティアに参加することになったのだろうか。

「僕が『スマイル作戦』に初めて参加したのは、1996年のことです。当時、勤めていた東京警察病院は、日本での形成外科発祥の地と呼ばれる場所だったので、形成外科ミッションである『スマイル作戦』の話がきたんですね。僕はその前年にアメリカでの医療ボランティアに参加していたので、実績が買われて白羽の矢が立ったというわけです」

「スマイル作戦」は、フランス・パリに本部をおくNGO「世界の医療団（メドゥサン・デュ・モンド）」が行っている、医療支援プロジェクトのひとつ。先天的疾患や戦災などが原因で、顔面や身体に奇形・損傷をもつ人々に手術を施し、「スマイル」のある一般的な社会生活を取り戻してもらうのが目的だ。

活動場所は主にアジアやアフリカを中心とする発展途上国。情勢が不安定な地域も多く、支援する側に危険が及ぶ場合も少なくない。96年に与座さんが訪れたルワンダも、例外ではなかった。

よぎ・さとし

1955年、沖縄県・宮古島生まれ。形成外科医。83年に岡山大学医学部を卒業後、岸和田徳州会病院、東京警察病院を経て、99年、新宿・百人町に「百人町アルファクリニック」を開業。96年から「スマイル作戦」に参加し、平均して年に2回、海外での医療支援活動を行なっている。



与座聡さん



※1 ルワンダ紛争

1990年に勃発した、フツ族政権とツチ族主体のルワンダ愛国戦線による内戦。ルワンダ内戦とも。現在は国民融和・和解への努力がなされ、政治の民主化が進んでいる。

※2 ジェノサイド

フツ族過激派による、ツチ族およびフツ族穏健派への大量虐殺。1994年4月にフツ族のハビヤリマナ大統領が暗殺されたことに端を発するが、暗殺首謀者は未だ判明していない。

「今でもよく覚えているのが、成田の出発ロビーでのこと。ルワンダはフランス経由で行くんですが、見送りにきていたボランティアスタッフの方が、『フランスに着いたら、ルワンダまで行けるかどうか聞いてみてください。先日から戦争が激化したようなので』と言うんです。疑問と不安を抱えたままパリに着くと、今度はそこのスタッフが、飛行機が使えなくなった場合の陸路での帰国方法を懇切丁寧に教えてくれるんですね。『これはヤバイことに足を突っ込んだかもしれないな』と、正直思いました(笑)」

96年といえば、ルワンダ紛争(※1)の被害が色濃く見られた時期だ。約3カ月間で80~100万人の犠牲者を出したといわれるジェノサイド(※2)が起こった、わずか2年後である。

天啓と欲望 共存するふたつの意識

「知識としてではなく、現実として『戦争』を感じたのは、『臭い』からです。燃えた重油の臭いや死体が放つ腐臭など、これまで嗅いだことのないような臭いが充満していました。

そんな状況下ですから、患者が溢れかえっています。とにかく手術をしな

いとイケないわけですが、医療機器や薬剤などは圧倒的に不足している。その上、HIV感染の可能性も考慮して自己管理にも気を抜けない。初めの1週間ほどは、ほと

んどパニック状態でした。前年のアメリカ留学で培った自信なんて、幻想みたいなものだったんだと思い知りましたね」

それでも、「とにかく医師である以上、自分にできることは手術しかない」と腹を括り、なんとか3週間の活動を終えた。帰国の途に就きながら、「手術がうまい先生」として派遣された自分の、達成感とは程遠いあまりの惨状に、悔しさを感じずにはいられなかったという。もう一度チャレンジしたいと思っていた矢先に、耳を疑う一報が届いた。

「僕らのあとにルワンダへ渡ったスペインのボランティアチームが、手術中にゲリラに銃殺される事件が起きたんです。たった1カ月違いの出来事で、僕らが死んでいてもおかしくなかった。それがこうして生き残っているということは、『この活動を続けるべきという天啓かな』と感じたんです。もっとも、妻にその話ではできませんでしたがね」

死ぬかもしれない状況を前に、それを「天啓」と言える人はどれだけいるだろう。なんて達観した人なんだと驚嘆していると、続けざま、手のひらを返すようにエゴイスティックな理由を語り出す。



「手術をして結果がついてくれば、それは僕にとって『快感』なんです。環境はあまり関係ないんですね。そうしてひとつ技術が上がれば、さらに向上したいという欲求が生まれてきて、要はそのくり返し。

『スマイル作戦』で扱う症例の多くは、唇裂や口蓋裂という先天奇形の特殊なもので、日本では手術の機会自体少ないものなんです。それらの治療技術をもっと極めたいという思いでやっていたら、気が付くと13年も続けていました」

ここにきて、取材前からずっと不思議に思っていた素朴な疑問が、改めて頭に浮かぶ。与座さん、いくら欲求を満たすためとはいえ、そんな危険なところにわざわざ行くなって、単純に怖くはないんですか。

「もちろん怖いですよ。でも未来は未知だから、考え出すと何もできなくなりますよね。自分に多少の技術があって、毛布を渡してあげるだけではなく、もっと本質的な救済ができるなら、それをやろうと思うだけなんです。それでもし、ゲリラに殺されたり、HIVに感染したりしても、自分の選択を後悔したり誰かを恨んだりはしないようにしようって、そう決めちゃったんですよ（笑）」

「考えても仕方ないですからねえ」とほがらかに言う。その様子からは、慈善活動を行なっているという気負いは感じられない。まるで「技術を磨く機会を与えられて、しかも人の命が助かるなら、一石二鳥だよ」とでもいうような無邪気さだ。「できるからやるだけ」。しかしもしかしたら、それこそがボランティアの本質なのかもしれない。



「百人町アルファクリニック」
<http://www.alphacl.com/>



「世界の医療団」
<http://www.mdm.or.jp/>



「スマイル作戦」
<http://www.mdm.or.jp/activity/02.php>

国境を超える 「医療」という名の言語

「小学生のころはね、地球儀にあるロシア（当時はソ連）を見て、そこが宮古島だと思ってたんですよ（笑）」

与座さんは沖縄・宮古島の生まれだ。160kmにも満たない小さな島とはいえ、子どもの足では近くの海岸に行くだけでも

ちょっとした距離だった。それが、世界には比べものにならないほど大きな国があると知り、与座少年は世界の広さにおののいた。

ところが、大人になり、「スマイル作戦」に参加するようになってから、その感覚がまた変わったという。

「フランスもアメリカもアフリカも、文化や宗教、価値観などの違いはあるけれど、人間の営みは一緒なんですね。それらの違いは受容するまでに時間はかかっても、理解してしまえばあまり問題にはならないと感じました。まるで医療がひとつの言語であるかのように、どこでも手術は通用するなと思いましたね。そう感じられるようになってからは、世界が小さくなりました」

世界を相手に『医療という言語』を駆使して、これから目指すこととは何なのか。

「本質的なことは内緒ですが（笑）、近い気持ちをお話すると、ボランティアというのは組織が継続的に行なってこそ意味や成果が出るものだと思うんです。だから『スマイル作戦』も後継者を育てることが大切。時代によって活動の概要や治療法などは変わるとは思いますが、支援する側の気持ちは変わらずに、継承し続けられるような団体になっていけたらうれしいですね」

「命ある限り続けますか」と聞くと、「20年やったら考えようかな」といたずらっぽく笑う。芯があるのに、頑ではない。柳に風と受け流す、与座さんのこの柔和さが、死の危険を伴うミッションでさえ「楽しくて仕方がない」と笑顔で言わせるのだろう。

Text by : 加護あまね

